

小学校外国語活動に関する研究 —フォニックスメソッド指導法について—

12002EMM

小嶋謙吾

小学校外国語活動が必修化されてから約2年が経つ。教育現場では、地域や児童の実態に即した年間指導計画を作成とすることとされているため、統一された指導法が確立されていない。英語指導助手として多くの学校で取り入れられているALT(Assistant Language Teacher)も各自治体によって大きく異なった研修が行われているために指導法が統一されていない。毎年行われている全国的な調査から、現場教員でも指導法に関する研修を強く望まれている。また学校間格差が徐々に開き始め、中学校入学時において小学校の指導法によって外国語科目に対する児童意識にも差が出てきている。さらに2013年12月に文部科学省は外国語活動を小学校中学年に引き下げ、小学校高学年において英語科目を設立する方針を固めた。学校格差を埋めるために地域や児童の実態を元に、ある程度の指導法の統一化が必要であると考え。現状調査の為、愛知県内の小学校の外国語活動の授業観察を行った。授業観察から各学校の特色を活かし様々な指導を行っており、ワードメソッド指導法、フォニックスメソッド指導法、ワードメソッド指導法とフォニックスメソッド指導法の両方が行われている指導法の三つに分類した。本論文では、その現状調査から分類した3つの指導法をそれぞれどのような効果があるのか考察を行った。その考察から、文字指導で行われるフォニックスメソッド指導法を外国語活動に取り入れることで、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませるための有効な指導法の一つであると提案している。また中学校英語科目を見通した外国語活動におけるフォニックスメソッド指導法としても活用が可能であることから有効なものである。